と刻まれています。ヒンドゥー教のガイドさんの説明によるとガンディーが銃で撃たれたとき、最後の言葉、つまり遺言は「おお神よ」の後「自分がやっていることを知らないから許してください」だったと言います。何とこれは聖書のルカ二十三章三十四のイエスが十字架に付けられたとき言われた言葉「父よ、彼らをお許し下さい。自分が何をしているか知らないのです」とあまりにも酷似しています。この記念碑の献灯は参拝者が絶えることなく灯は消えることがないそうです。ガンディーの非暴力的抵抗運動を貫いた精神を引き継いでいるインド国民がいることに感動しました。今、日本は「平和憲法」が危機（と私は思う）の時、実際にガンディーの精神を目にしてうらやましく思いました。ヒンドゥー教では、お墓はないそうです。人が亡くなると火葬し、水に流すことによって天に帰るといわれ、その後再び生まれ変わるという教えです。この輪廻転生と、復活信仰を持つ私たちとの間にどこかで接点があるのでしょうか。今日、主の復活の喜びの日にもう一度、旅の宿題として私たちの復活について深く黙想しようと思いました。

都市の中の観想

使徒ヨハネ　西山　教行

パリの雑踏をかき分けて、市役所の裏手に回ると、サンジェルヴェ教会の正面入り口があたりの建築のなかでもひときわ輝き、まなざしに飛び込んでくる。ここは、パリのセーヌ川右岸の教会でも最古の教会の一つで、その起源は六世紀にさかのぼる。現在の聖堂は十五世紀以降に建立され、ルネサンス様式と古典主義様式が絶妙に組み合わされ、その内部は輝く聖母子のスタンドグラスを中央にいただき、光の満ちあふれとなっている。

この教会に、エルサレム修道会の修道士、修道女が集まり、日に三回の祈りと沈黙を捧げるようになったのは、一九七五年の諸聖人の祝日からのことである。創立者ピエール・マリー師は、都市のただ中の観想生活、これは天上の都エルサレムにつどう神の民のかたどりであると考え、都市という砂漠に祈りのオアシスを作った。イエスが荒れ野で試練を受け、神との交わりを深めていったように、かつて砂漠は修道者たちの試練の場であり、同時に神との出会

いの場でもあった。ところが、現代世界の、砂漠は荒れ野にあるとはかぎらない。都市のただ中こそ、私たちの砂漠、荒れ野は広がっている。

このような都市の砂漠に召し出された修道者たちは、現在パリに五十人ほどを数える。彼らは、朝昼晩の典礼、日曜十一時からのミサなどに、イコンや祈りの姿勢など東方教会の伝承を取り入れつつ、天井の祈りのかぐわしさを地上でもいち早く味わわせてくれる。その歌声は、ともに祈る人々をダビデの奏でる竪琴にあわせた典礼へといざなうようでもある。

修道士、修道女たちは神の都の多様性を生みだしている。ヨーロッパの隣国から召し出された兄弟姉妹ばかりでなく、アフリカやアジアから招かれた顔も見受けられる。二人の日本人修道者も多様性の恵みにあずかっている。二人はパリではなく、ブルゴーニュ地方の聖都ヴェズレーの聖マリア・マグダラ聖堂修道院にて、祈りを和している。フランスの観想修道会の多くが高齢化の荒波にさらされていることをよそ目に、エルサレム会には若き男女が道を求めてやむことがない。聖霊の息吹の力強く働いているあかしかもしれない。

「起きて町に入れ、そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」（使徒九、六）エルサレム会の修道士たちはこのパウロに語られたことばを日々、実践しているのだ。

パリという町に入られる機会を持たれた方には、ぜひともその透明で甘美な祈りにあずかり、天上の典礼の美しさを味わわれんことを。